

地域・海外リサーチセンター：ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター	
題目	「ふくしま浜通り社会イノベーション・イニシアティブ（SI 構想）」の具体化と社会実装
著者	松岡俊二、永井祐二、李洸昊、朱鈺、任羽佳

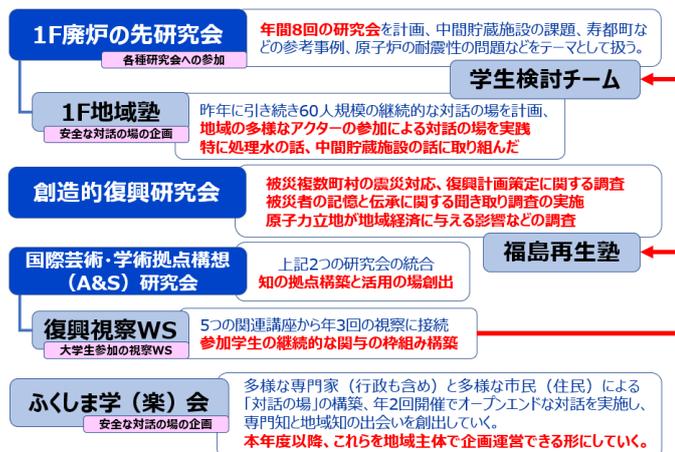
1. 研究の概要

福島における復興と廃炉に関する調査研究を、地域の皆さんと多様な専門家とが協働して実施し、長期的・広域的な観点から復興と廃炉の将来像の選択肢を広く社会へ提案する。このことを通じて、2050年に持続可能な福島浜通り地域社会の形成を目標とした社会イノベーション（社会変革）を創造し、日本社会の再生を実現する。

2. 本年度の研究開発、成果

今年度も「福島浜通り社会イノベーション・イニシアティブ（SI 構想）」をベースに、「1F 廃炉の先研究会」と「創造的復興研究会」の研究調査活動を行い、またそれにぶら下げる形で対話の場を設計した。研究会と対話の場は、相互に刺激を与えつつ、双方を高度化させたと考えられる。

教育研究プログラムの本年度の実施内容



1F 廃炉の先研究会では、1号機の耐震評価や中間貯蔵施設の現状のような技術中心の専門性の高いテーマから、廃炉と地域社会に関するガバナンスや海外事例など、幅広いテーマを設定し、一般住民がどのように廃炉に関わって行けば良いかについて学びの場を設けた。また、比較的に専門性が高い問題が絡まっている1F 廃炉においては、学びだけでは不十分であり、自分なりに理解し、咀嚼する対話と学びを同時に可能にするための1F 地域塾を開設した。

「創造的復興研究会」では、2050年ごろの福島浜通り地域の将来像を検討するというミッションを具体化するため、テーマを経済・産業政策、社会構造・ローカル・ガバナンス、災害文化・遺構と世界遺産)に分け、それぞれの相互の関係を考えながら、福島浜通り地域の将来像を検討した。

ふくしま学(楽)会では、「私たちの創造的復興とは何か」や「対話の難しさ」などの多様なテーマが設定され、福島だけでなく日本社会で「対話の場」=「学びの場」の形成の重要性が強調された。また、本学の大学・院生が「1F 地域塾」や「ふくしま学(楽)会」に参加し、福島浜通りを頻りに訪ね現地視察や現地の住民、中高生との「対話の場」を通して、それまで東京で見聞きしていた遠くの出来事をより身近に感じ、原子力災害を「自分ごと化」に結びつくと考えられ、「境界知作業」を担う人材育成が進行している。

1F 地域塾では、1F 廃炉政策のあり方を「社会のなかの廃炉」「地域のなかの廃炉」という視点から考えることに焦点が当てられた。1F 廃炉の先(将来像)の多様な選択肢から考える際に、1F を事故遺構として残し、そのあり方についてふたば未来学園の高校生から報告があり、その後、その点も踏まえて1F 廃炉の先(将来像)について議論が行われた。様々な立場からの議論が行われ、参加者が多様な選択肢に対する自分の解釈が深まったと考えられる。

地域における Learning Community の形成



3. 次年度の研究計画

次年度は1F 廃炉の先研究会や1F 地域塾、創造的復興研究会と福島再生塾(4月スタート)を中心に活動を展開していく予定である。「ふるさと創造学」のプラットフォームを継続運営するため、地域における課題解決研究を維持し、そこへの高校生や様々な世代が参加可能な対話の場、学びの場を維持・継続する。対象人材相互の学びの場(learning community)である「1F 地域塾」「福島再生塾」を、それぞれ創出し、これを成果として残すようにする。また、地域の主体者が自主的に対話の場、学びの場を企画できるように支援する。